河北泰三氏　七福タオル株式会社　代表取締役

河北泰三氏

今治のタオル業界で異彩を放ちつづけているタオルメーカーがある。二代目の河北泰三氏が率いる七福タオルである。七福タオルはかつて売上の100%を問屋からの受注に依っていたが、いまは90%以上を直販で流通させており、バニシリーズの「オプス」をはじめ、さまざまなオリジナルの自社ブランドを展開している。河北氏は若い頃、本気で落語家を目指していただけあり、七福タオルの製品はユーモアのセンスに溢れている。「笑う門には七福タオル」のキャッチフレーズが表しているように、七福タオルには人を幸せな気分にさせる理由がある。

かわきた・たいぞう　☆　1962年５月、愛媛県今治市別宮町生まれ。1969年４月今治市立別宮小学校入学。同校を卒業後、1975年４月今治市立近見中学校入学。1978年４月愛媛県立今治南高等学校へ入学したのち、経営に関する専門知識を身に付けたいと考えるようになる。そして、1981年４月東海大学工学部経営工学科入学。同校では落語研究部に所属し、４年間落語に浸る。大学卒業後は落語家になりたいという夢をもつが「母の涙」で帰郷し、七福タオル工場に入社して家業を継ぐ。100%問屋からの受注生産をしていた同社を自社ブランド等の開発で直販比率を上げ、「七福タオル」ブランドを確立し現在に至る。

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

１．　幼少青年時代

河北家のルーツは山口県

河北泰三氏は、1962年５月19日に今治市別宮町に生まれた。父親の明氏は七福タオル（株）の創業者であり、タオルの製織工程における職人であった。母親の律子氏は、今治市出身で実家は米穀商を営んでいた。そのため、明氏と結婚してからタオルづくりについて学び、整経や縫製などもこなすタオル職人となった。

河北氏には上に兄が二人いる。５つ上の長男・誠氏は、現在薬剤師として大分県中津市で薬局を経営している。２つ上の次男・貫次郎氏は、歯科医として今治市内で「河北歯科医院」を経営している。河北家の３人兄弟は揃って経営者である。

３人の名前にはそれぞれに由来がある。いずれも洒落っ気のあった父親が名付けたものであるが、長男は性別にこだわらない「マコト」、次男は生まれたときの体重がおよそ１貫20匁（もんめ）（3,825g）で比較的大きな赤ちゃんだったことから「貫次郎」。そして、三男の河北氏は、七福タオル工場の売上が伸び悩んでいた時期に誕生した赤ん坊であり、「商売が安泰に末長くつづきますように」という願いを込めて「泰三」と命名された。「いまから考えると、この名前はタオル工場の継承者として、もう宿命ですね」と河北氏は言う。

河北義次郎

（写真提供：松陰神社）

河北氏の父方の祖先を辿ると、山口県萩市に行き着く。萩市と言えば、松下村塾で歴史的に有名な場所で

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

あるが、河北氏の曽祖父の兄・河北義次郎（俊弼（としすけ））は元長州藩士で松下村塾と深い係りがある。義次郎は、1844年に長門国萩松本村に生まれ、萩藩校**明倫館**で儒学や兵学、武道について学び、その後松下村塾に入塾し**吉田松陰**のもとで武士たるものの姿勢と学問の尊さを学んだ。幕末の1864年に**干城隊**に所属し、久坂玄瑞とともに上京した。幕末動乱に翻弄されながらも、1867年藩命により渡米し、その後イギリスに渡ってロンドン大学ユニバーシティ・カレッジで法学などを学ぶ機会を得た。明治期に入り1872年にイギリス公使館御用掛となり、そのままイギリスに滞在し、帰国後は陸軍歩兵少佐となり佐賀の乱や西南戦争などで活躍した。1888年に外交官に転じ、サンフランシスコ領事に就任し、明治政府のために奉職した（河北義次郎については、河北珍彦[1989]「河北家略譜」に詳しい）。

義次郎の甥が河北氏の祖父・秀雄氏であり、東京生まれである。秀雄氏は、今治役場職員として今治市に着任し、祖母・信代氏と結ばれ今治に落ち着いた。今治市周辺地域で河北姓が珍しいのはそのためである。秀雄氏には、長男・龍雄氏、次男・郁雄氏、三男・珍彦（よしひこ）氏、四男・隆久氏、五男・明氏、そして長女・愛子氏の6人の子供がいたが、四男と長女は早世している。

1943年、秀雄氏は、河北氏の父親・明氏が14歳のときに不慮の事故で亡くなってしまう。家計を支えるために明氏は18歳で叔父と叔母にあたる河北龍雄氏とテル子氏が経営する河北タオル（1954年創業）に手伝いで入り、その後タオルの製織技術者としてキャリアを積んだ。

河北タオルは、産地内の2次下請けをする家族経営の小さなタオルメーカーであった。叔父と叔母には4人の子供がいたが、タオル工場を継ぐ者がいなかった。そこで、叔父は河北タオルを徐々に縮小させて一代で廃業するつもりでいたため、明氏はタオル工場を手伝いながら早々に独立に向けて準備をした。河北タオルは、1962年の叔父の早逝にもかかわらず、叔母と従業員が力を合わせて

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

1972年10月の廃業まで経営をつづけた。一方の明氏は、1959年、30歳のときに独立を果たし、七福タオル工場を創業した。妻の律子氏と二人三脚で、細々ながら問屋制下請企業としてタオル工場を立ち上げた。河北氏が生まれたのは同社創業の3年後のことである。

1歳になった頃の河北泰三氏

明るくうぶな少年に、モテ期到来!?

河北氏は、1968年4月に今治市立別宮小学校に入学した。小学校の低学年まで恥ずかしがり屋で人のうしろに隠れているような子供だったが、高学年になり、たがが外れたかのように明るく目立ちたがりの少年に成長した。クラスのムードメーカーで学級委員長も務め、友だちもたくさんできた。

タオルに囲まれた生活のなかで、小学校低学年の頃から兄たちに混じって贈答用の箱詰め作業の手伝いをはじめたが、家業について真剣に考えたことはなかった。ただ、河北氏が4年生のときに「昭和47年7月豪雨」によって自宅とタオル工場が浸水してしまい、タオルメーカーの命である織機に大きな被害が出た。河北氏は、朝3時頃に「水没で死んでしまうぞ」と父親に叩き起こされ、水に浸かった無惨な姿の工場や両親の狼狽した様子を目の当たりし、ショックを受けた。「タオル織機は水に濡れたら使いもんにならんのやな」としみじみおもったと同時に、「当たり前に過ごしていた毎日」について考えるきっかけとなった。

また、両親が自分たち子供のために懸命に働いている様子をひょんな出来事から改めて実感した。それが6年生のときの運動会である。日曜日に実施予定だった運動会が雨で順延となり、翌日の月曜

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

日に開催された。平日で忙しいところ両親が揃って運動会へ参加してくれたが、昼飯は車のなかで家族揃って食べた。「通常は運動場に張られたテントのなかで食べるが、なぜ自分だけ車のなかで食べるんか？」と不思議におもったが、すぐに合点がいった。両親は、仕事の合間にちょっとした時間をつくって運動会に顔を出し、昼の休憩が終わったらすぐに仕事に戻れるように段取っていたのである。

七福タオル工場にて、河北泰三氏８歳頃の写真

母・律子氏（左）、河北氏（中央）、次兄・寛次郎（右）

1975年４月、河北氏は今治市立近見中学校に入学した。中学校では軟式テニス部に入り、白球を追いかけた。兄二人が剣道部や柔道、弓道部に所属していたため、自分は違う方向に進もうとおもって少しハイカラなイメージのあった軟式テニス部を選んだ。軟式テニス部での思い出は、３年生の今治市内中学校軟式テニス大会で、残り１勝すれば県大会出場という場面である。試合は７ゲームマッチの４ゲーム先取で勝者が決まるルールである。対戦相手は市内でも３本の指に入る強豪ペアだった。河北氏のペアが３ゲーム先取で試合を有利に進めていたが、「あと１ゲーム」が頭をよぎり、後衛

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

の河北氏は緊張してしまった。結局、残り４ゲームを相手ペアに連続して奪取され負けてしまった。河北氏はおもった。「自分はなんて詰めが甘いことか。」このとき味わった悔しさはいまも脳裏に焼き付いている。

部活動での活躍に加え、河北氏の周りにはいつも笑いがあり、クラスでも人気者だった。そんな中学校時代に人生初のモテ期がやってきた。何人かに告白され、一度だけお付き合いしたことがある。お付き合いと言っても、返事をしただけのお付き合いである。「さぁ、これからお付き合い」とおもうと、昨日まで普通に喋っていたのに意識しすぎて顔すらまともにみれなくなった。河北氏はおもった。「自分はなんてうぶな人間なんだ。」これ以来、モテ期が到来してもお付き合いすることはなくなった。

近見中学校を卒業した河北氏は、1978年４月、愛媛県立今治南高等学校普通科へ入学した。高校でも軟式テニス部に所属し、中学校時代に味わった悔しさを胸に秘めて厳しい部活動生活を送るつもりは毛頭なく、仲間と輪を重んじる穏やかな部活動生活を送った。一方で勉強は苦手だった。数学は得意だったが、化学と古文がとくに不得手だった。

大学への進学をぼんやりと考えていた河北氏は、２年生の「倫理・社会」の授業で担当の先生が、「大学に行くなら東京へ行きなさい」と何気なく放った言葉に妙に共感を覚えた。そして、３年生になり、いよいよ大学と学部を決めるタイミングが来た。まず、学部選びである。河北氏は、東京の大学で「経営工学」を学べる大学を探しはじめた。その理由は２つある。サラリーマンより商売人の方が性に合っているとおもっていたこと、中学校時代に波止浜造船（株）の倒産を全国版の新聞で知って経営に興味をもったことである。波止浜造船は、1943年創業の木鉄船を製造していた伊予木鉄造船が前身である。伊予木鉄造船は、1948年に閉鎖機関産業設備営団から造船所の機械や設備の払い下げを受けて鋼船をつくるようになり、1950年に波止浜造船に改称された（愛媛県史編さん委員会編「第

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

四章　第二次大戦後の愛媛県工業」『愛媛県史　社会経済　３　商工』1986年、429頁）。その後、時代の流れに乗って成長し、来島船渠と今治造船と並んで地元の三大造船所に成長したが（同上、429-430頁）、1977年12月に430億円の負債を抱えて倒産した。地元企業の倒産のニュースが全国紙に掲載された事実が河北氏にとって驚きであり、このニュースをきっかけに経済や経営に関心を抱くようになった。

つぎに、大学選びである。東京で経営工学を学べる大学を調べたところ、青山学院大学、日本大学、東海大学が候補として上がった。担任の先生に相談したところ、東海大学の指定校推薦を薦められ、東海大学工学部の受験を決めた。ただ、指定校推薦に必要な評定平均が「3.5」だったため、その時点で「3.2」の河北氏は苦手な古文を頑張るしかなかった。「なぜレ点があるのか？なぜ前後を逆にして読むのか？」など疑問だらけの古文と格闘した結果、見事に評定平均を「3.5」まで上げ、指定校推薦で滑り込めた。

12月に東海大学工学部経営工学科の合格通知を受けとり、進路が決まった。高校卒業までの数ヶ月間、無駄な時間を過ごさないためにアルバイトをはじめた。**（株）今治地方情報センター**（現・（株）IJC）で雇ってもらえることになり、学校とは違う企業組織というものを初めて経験する貴重な機会となった。

高校時代は仲間と一緒に楽しい日々を過ごしたが、極め付けは修学旅行だった。東京、栃木（日光）、山梨（富士五湖）を巡る３泊４日の旅だった。広島の三原駅まで船で行き、三原駅から東京駅まで新幹線で向かい、現地到着後はバス移動だった。長い道中も各観光地でも仲間との集団行動は時間を忘れるほど楽しい体験だった。

幼稚園の年長の頃から年に１回の頻度で両親が家族旅行に連れて行ってくれたこともあり、旅は河北氏にとって身近にあった。家族旅行で最初に記憶に残っているのは奈良だが、その翌年に行った東京でのある出来事は幼い河北氏にとっていい迷惑であった。曽祖父の兄・河北義次郎が眠る青山霊園（東京都港区）の墓に連れて行か

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

れ、父親が熱心に河北家の話をしているが、内容が難しすぎて理解できないし、すごい数の蚊に刺されるし、幼少の河北氏にはストレス以外の何ものでもなかった。翻って、東京への家族旅行は強烈な思い出として残っている。

落研との出会い

1981年４月、河北氏は東海大学工学部経営工学科のある湘南キャンパスにいた。今治から遠く離れた場所での一人暮らし。最初の１年間は神奈川県平塚市のアパートに下宿した。２年目からは小田急線相模原駅近くに引越しをした。のちほど河北氏の人生に大きな意味をもつ、落語との出会いが引越しの理由である。

入学式のある４月はサークルの新入生勧誘のシーズンであり、どこの大学でも恒例行事である。河北氏がキャンパスを歩いていると、「君、落語家の顔をしてるね」と、落語研究部（通称、落研（おちけん））の学生から声をかけられた。立ち止まって話を聞いているうちにまんざらでもなくなり、勢いで落研に入部した。落研の活動拠点の最寄り駅が相模原駅であり、落語に恋した河北氏は上京２年目から相模原駅近くに引っ越した。落研では３つ上の先輩に**春風亭昇太**氏がいた。河北氏と春風亭昇太氏のつながりはこの落研からはじまる。春風亭昇太氏とはいまでも良縁で結ばれており、河北氏のタオル人生にたびたび登場する。

東海大学湘南キャンパス１号館

（東海大学 HP より引用）

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

今治にいた頃、毎週日曜日の夕方になると、河北家のテレビは「笑点」（日本テレビ）にチャンネルが合わされており、そこからなんどきも笑いが漏れていた。それゆえに落語は知っていたが、まさか自分が落語家として話をする立場になるとは、落研に入る日まで夢にもおもわなかった。先輩たちから落語のいろはを学び、落語の演目をとおして人情を知り、河北氏は粋な世界に没頭していく。

数ある演目のなかで河北氏の十八番は、上方落語の演目にある「九日目」である。往年の桂枝雀がたまに演じていたが、好んでとり上げる落語家は少ない。現在でも「九日目」を知っている落語家はそう多くないし、実際に演じる落語家もほとんどいない。河北氏が「九日目」に最初に出会ったのは、日本大学の落研の学生が演じているのを偶然に聴き、そのオチが真っ直ぐに河北氏の脳天に突き刺さった。「この噺はなんて素敵なんだろう！」

ここで簡単に「九日目」のオチを紹介しておこう。

「九日目」の登場人物は「わて」と「死神」である。気が弱く周りにいつも気を遣っているわては、死神から余命九日を言い渡される。九日目の朝、鳥の鳴き声とともにこどんとあの世に行くと告げられる。そして、わての命もあと三日になり、わては今日から言いたいこと、したいことをやろうと決める。わては近所の人に言いたい放題、女風呂にも入るし着物のまま風呂にも入る。思い残すことなく迎えた九日目の朝、わては覚悟していたのにこどんと死なない。そこに死神が現れた。死神は、わての様子をみて面白がっていたが、「お前は人より長く生きるたちや」と言い、最後に「わいかて周りに気を遣う気の弱い死神やねん」と告げて消えていった。

代え難い財産

落研に所属してよかった点の１つが、他大学の落研との活発な交流であった。東海大学の落研は青山学院大学と國學院大学の落研と「渋谷三大学落語会」を結成しており、頻繁に相互交流をおこなっ

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.

ていた。落研を介して他大学にもたくさんの仲間を得たことは、河北氏の大学時代を有意義なものにしてくれた。河北氏いわく、「落研に入って交友関係がグッと広がりましたね。それはいまでも代え難い財産になっていますね。」

東海大学湘南校舎８号館前で下級生の女子部員と呼び込みをしている様子（1983年５月）

左から２番目が河北泰三氏

落研での時間は河北氏の青春そのものであった。勉強もそれなりに頑張った。経営工学科では、理系ながら経済学や経営学の科目もあり、基礎的なマネジメントについても学んだ。そして、鳴沢暁先生のゼミに入り、このときは落語家として食っていこうと考えていたが、研究テーマに選んだのは「タオルの市場と売り方」であった。

（次号につづく）

Copyright (C) Imabari City Library All Rights Reserved.